

専修大学『専修史学』 第56号 (2014年3月) 抜刷

『比較目録』 *Catalogue comparé*
第6、7巻の調査結果

近 江 吉 明

『比較目録』 *Catalogue comparé*

第6、7巻の調査結果

近江吉明

はじめに

『比較目録』*Catalogue comparé*とは、故ミシェル=ベルンシュタイン Michel Bernstein (1906~2003) が収集したフランス革命関連史料の全データ（本学では、「ベルンシュタイン文庫 «Bibliothèque de Michel Bernstein»）と命名した。以下、「ベル文」と略）について、専修大学図書館が作成した仮目録（全9巻）のことをいう⁽¹⁾。そして、この目録の第6、7巻はM=ベルンシュタインが「フランス国立図書館（BN）には存在しない史料」として特定していたものの目録となっている。

さて、筆者がこの「ベル文」の調査に本格的に係わるようになったのは1996年からであった。「ミシェル=ベルンシュタイン文庫の社会史的研究」が学術振興会の「科研費・基盤研究B」（1996~1998年）に認められたからであった⁽²⁾。その機会に、「ベル文」内の陳情書の調査を開始した。そして、それから17年経った2012年、懸案の『比較目録』（第6、7巻）に収録され Tome 番号の付されたBNには無いとされる全史料に関しての調査が完了した。

ところで、フランス中世の民衆蜂起研究を専門としている筆者が、「ベル文」史料を活用し始めたのはフランス革命期の「ジャクリー」に注目した1999年からであった。結果的にオルヌ県文書館のアルシヴィスト、ジャン=クロード=マルタン Jean-Claude MARTIN の協力の下、オルヌ県の1789年春段階における第1次選挙集会時の第三身分陳情書を読むことになり2002年より数編の

(1) Bibliothèque de Michel Bernstein: *Catalogue de l'Histoire de la Révolution française par Bernstein, comparé avec le Catalogue de la Bibliothèque Nationale, par André Martin et Gérard Walter, Tomes 1~5, Ikuta, 1978, Tomes 6, 7, Ikuta, 1980, Tomes 8, 9, Ikuta, 2001.*

(2) 近江吉明「バステューユ以前のジャクリー」（『専修人文論集』第70号、2002年）。

論文となっている⁽³⁾。その関連で、すでに確認していたオート・ロワール Haute-Loire 県関連の陳情書にも注目するようになり、2006 年からは当県文書館のアルシヴィスト、ティエリ=アルワン Thierry ALLOIN の指導の下、ル・ピュイ・アン・ヴレ Le Puy-en-Velay 市の下級選挙集会時の第三身分陳情書マニユスクリを読み始めてもいた⁽⁴⁾。それは Haute-Loire 県の地方史研究誌に掲載されている⁽⁵⁾。

本稿は、17 年目の「ベル文」調査研究の中間総括の一つとしての、『比較目録』第 6、7 巻の調査結果報告である。

1、『比較目録』 第 6、7 巻について

専修大学図書館が所蔵する「ベル文」は、前述のようにフランスの有名な書誌学者、古書籍商の M=ベルンシュタイン氏が 40 数年の歳月をかけて収集した約 47,000 点のフランス革命関連史料群のことであるが、それを専修大学が 1977 年の創立百周年に際して一括購入したものである。では、『比較目録』(全 9 巻)はどのようにして誕生したのかを見ておこう。

(1) 『比較目録』(全 9 巻)の誕生

当該目録は、一瞥すればわかるように一般的な意味での「ベル文」の総合目録ではなく、M=ベルンシュタインが作成した一種の史料「収集記録」である。

(3) 近江「陳情書にみられる農民的要求の特徴—バス=ノルマンディー、オルヌ県の場合—」(『専修大学人文科学年報』第 34 号、2004 年)；同「グランド=プール期のジャクリー=バス=ノルマンディー、オルヌ県の場合」(『専修人文論集』第 77 号、2005 年)；同「陳情書にみられる農民的要求の特長について」(『専修史学』第 40 号、2006 年)；同「陳情書にみられる農民的要求について (その 2)」(『専修史学』第 41 号、2007 年)；同「フランス革命期のジャクリー」(『歴史学研究センター年報』第 5 号、2007 年)。

(4) Yoshiaki OMI, « La Valeur et le caractère historiques de la Collection des Documents de Michel Bernstein — Autour de l'analyse d'un Cahier de doléances du Tiers Etat de la ville du Puy, département de la Haute-Loire — », *The Michel Bernstein Collection and Studies on the French Revolution*, ed., Center for Historical Studies, Institute for Development of Social Intelligence, Senshu University, n. 5, 2008.

(5) Y. OMI, « Cahier de doléances du tiers état de la ville du Puy, élaboré au stade initial du processus électoral (version corrigée et commentée) », *Cahiers de la Haute-Loire*, Année 2009, pp. 189-203.

その内、*Catalogue de l'Histoire de la Révolution française*, Bibliothèque Nationale de France (フランス国立図書館編『フランス革命史料目録』)との比較を目的にM=ベルンシュタインによって手書きされたカード「原稿」を1巻から5巻までにまとめ、本学図書館が『比較目録』(*Bibliothèque de Michel Bernstein: Catalogue de l'Histoire de la Révolution française par Michel Bernstein, comparé avec le Catalogue de la Bibliothèque Nationale, par André Martin et Gérard Walter*, Tomes 1-5, Ikuta, 1978)として出版したものである。

さらに、1980年には「A. Martin et G. Walter の目録には収録されていない」⁽⁶⁾カード目録の約11,000点を第5巻までの補巻として、『比較目録』第6、7巻(*Bibliothèque de Michel Bernstein: Catalogue de l'Histoire de la Révolution française par Michel Bernstein, comparé avec le Catalogue de la Bibliothèque Nationale, par André Martin et Gérard Walter*, Tomes 6,7, Ikuta, 1980)を出版した。それからしばらく経った2001年に、新聞や年報の収集史料、伝記や *répertoires* などが第8、9巻として一冊にまとめられ『比較目録』に加えられた。

以上の経緯からも浮かび上がってくるように、第5巻までの史料群もさることながら、第6巻以降の各巻にこそ「ベル文」の多様な価値が潜んでいるということになるのである。とりわけ、第6、7巻はBNには見あたらない史料情報を補巻として発刊したことが明言されていることからしても、この2巻に収録された史料群の確認は、私たち「フランス革命史料研究センター」のこれまでの調査研究の中核を占めることになった。

(2) M=ベルンシュタインの史料収集の流れから

M=ベルンシュタインから寄せられた「革命期文庫についての覚書」(『専修大学ミシェル=ベルンシュタイン文庫だより』創刊号, 1980, p. 5-11)からもわかるように、彼が主に、父親のレオン=ベルンシュタイン Léon Bernstein の影響の下、第二次世界大戦後の1948年より本格的に再開した古書籍業の中で直面した問題は、膨大なフランス革命関連史料群の整理作業であった。それらの

⁽⁶⁾ B. M. B., Tomes 6, 7, avant-propos.

幾つかの作業の一つとして、彼は A=マルタンと G=ヴァルテールによるBNの『フランス革命史料目録』への書き込みによる確認を行なった。しかし、これは必然的に彼のコレクションの「稀少性」を明らかにすることにつながっていたのである。結果的に彼は、「私のコレクションは、19世紀を通して作られたフランス国立図書館や、大英博物館のコレクションと比べられるものではないことは承知していますが、それでも個人によって作られたコレクションとしては、現代で最も重要なコレクション」⁽⁷⁾ となったとの認識に到達したのであった。だから彼は、「この何年にもわたる作業のすべて、私の宝とするコレクションが、19世紀の終わりに、ポシエ=デロシュやナダイヤックのコレクションの場合にそうであったように、私の死後売却され、四散してしまうのではないか」⁽⁸⁾ という恐れを持つことにもなった。

したがって、本学図書館が『比較目録』の第6巻以降を発刊したことは、彼個人にあっては納得のいく「結果」の一つであり、これに満足していたことは想像に難くない。そして、だからこそ、とりわけ「BNにない」と認識されたその第6、7巻の史料情報のさらなる調査研究は、間違いなく彼にとっても遣り残した気がかりな、しかも、厄介な仕事の一角に踏み込む試みであったということになる。ということからすれば、私たちのここまでの取り組みは彼が亡くなった2003年以降にあっては彼の遺志を引き継いでいることになったと言えるのである。

2、調査方法とここまでの経過

『比較目録』第6、7巻の調査に関して、筆者は、果たしてそれらの史料がBNに無いものなのかどうかを確認する作業をどのような形式で実施すべきかの予備調査を在外研究実施1年前の2003年に行なった。BNに出向き、BNのオンライン目録である「BN-OPALE PLUS」を利用して、まず、第6巻内のいくつかの史料を特定し検索することをやってみた。検索のスピードとヒットした場合にはそれが同版なのかどうかのチェックの仕方など、基本作業の手順

⁽⁷⁾ M. BERNSTEIN, « Mémoire sur ma collection révolutionnaire », *Bernstein· Bunko Dayori (Bulletin de la Collection Michel Bernstein)*, n. 1, 1980, p. 11.

⁽⁸⁾ *Loc. cit.*

を確認することから始めた。

しかし、そうしたサンプリング調査の結果、それらの作業は夏期休暇を利用しただけの短期滞在の中で処理できるようなものでないことが判明した。そこで、筆者は自分自身の置かれた研究環境および「ベル文」周辺の人的力量に鑑み、フランス側の研究機関との共同調査研究によって進めるべきとの結論を得ることになった。ということもあり、筆者はパリ第一大学の「フランス革命史センター（以下、IHRF と略）」Institut d'Histoire de la Révolution française を2004年に訪ねることになったわけである。

(1) ジャン-クレマン=マルタン Jean-Clement MARTIN 教授との出会い

実は、2005年実施の本学「社会知性開発研究センター・歴史学研究拠点」の国際シンポジウム^⑨におけるフランス側の報告者としてJ・C=マルタン教授にお願いすることを2003年に機関決定しており、筆者がすでにその打診やら正式依頼をしていた。また、2004年度に筆者は在外研究の機会にIHRFを訪ね同教授にお会いすることになった。

そうした好条件もあり、国際シンポジウムでの報告受諾に対するお礼も込めて、パリ第一大学（ソルボンヌ）にあるIHRFの事務所を2004年の6月に訪ねた際に、研究所スタッフのエリザベット=リリ Elisabeth LIRIS 女史同席の下、同教授に対し『比較目録』第6、7巻の共同調査研究の打診をすることになった。しかし、「ベル文」とは何であり、そもそも『比較目録』とはどんなものであるのかを理解してもらわなければならないということもあり、あらかじめ用意しておいた各巻数枚のコピー資料を見ていただきながら、丁寧に説明したのを覚えている。当然、お二方からも的確な質問が矢継ぎ早に提示されたが、概ね筆者の返答に納得され、関心を深めていただくことができた。

フランス革命史研究においては当時全く無名の筆者ではあったが、J・C=マルタン教授は熱心に聴いてくださり、「フランス革命史料研究センター」がなぜ『比較目録』の第6、7巻に注目しているのかを理解して下さった。その結果、いくつかの条件の下、快諾していただくことができた。そして、ヴァカンス明けまでに専任スタッフを決めていただけることと、それまでに『比較目録』（全

^⑨ Jean-Clément MARTIN, « La Grande Terre en question », *Annual Report.*, n. 3, 2006.

9 卷) を私たちの方から送らせていただくことを確認し同意したのであった。

その際に、調査の仕方として、BNの検索サイト BN-OPALE PLUS の他に「フランス共同目録」Le catalogue collectif de France (CCFr) を活用しようとの提案を受けた。というのも、CCFr には、高等教育機関の目録 (SUDOC) と、地方の市立図書館および専門図書館の目録 (BMR ou BASE PATRIMOINE) が含まれているからであった。つまり、単にBNにあるかどうかではなく、完全ではないにしてもフランスに存在するかどうかの確認が同時に出来るからであった。したがって、この調査が完了すれば「ベル文」にしか存在しない史料が見えてくることが期待された。これはM=ベルンシュタインの遺志でもあり、筆者が願っていたことでもあったが、そればかりか、新史料の発見は世界のフランス革命研究の発展に大きく貢献することにつながることも予測できた。

このようにして、ようやく調査研究の体制作りができあがった。ところで、M=ベルンシュタインは2003年の酷暑の年に97歳で亡くなっていたが、IHRFでの私たちの新たな取り組みがその翌年にスタートしたということに何か因縁めいたものを感じるのは筆者だけではないだろう。しかも、その訃報に気付くのが2004年の秋であったということもあり、なおさら感慨深いものがあった。というのも、M=ベルンシュタイン氏に直接お会いし「ベル文」についての関連情報を聞いておくべきであると考えていた筆者は、同年4月には彼宛に手紙を出してもいた。ところが、その手紙が宛先不明で返送されてきた段階から不安を感じ始め、アムステルダム古書籍業者で彼の親友であったアントン=ゲリッツ Anton Gerits 宛てに手紙で問い合わせるということもしていた。ネット上で調べを進めたところ、『リベラシオン』(Liberatin, 2003年9月1日付)紙上に彼の訃報が報じられていた。それによれば、2003年8月15日オーセール近郊にて97歳で亡くなったというのである。

(2) 調査の経過

さて、J-C=マルタン教授より私たちの共同調査研究の担当者として紹介いただいた方は、最初から同席していたE=リリ女史であった。彼女は、筆者の提案の客観的意味を最も理解している研究者であった。それから2年間の準備期間を置き、2007年度から当該調査が開始された。しかし、E=リリ女史は御家族の

都合で調査が続けられなくなり、急遽彼女に代わって、当時、IHRF の研究員の一人であったマリア=ベトレム=カステッラ=プジョルス女史 **Maria Betlem Castella PUJOLS** に担当していただくことになった。プジョルス女史には手始めに第6巻の1,017点の調査をお願いし、2007年11月の本学での国際シンポジウム「フランス革命研究とミシェル=ベルンシュタイン文庫」で、その調査結果を報告していただいた。

その結果、彼女は『希少』と『唯一』とを混同してはならない。これらの史料を『希少』なものであると言うことはできようが、『唯一』のものだとはいえないのである。まだ情報処理された目録を持たない他の図書館や、国立古文書館、県文書館、地方文書館にこれらの史料が存在する可能性は、おそらく否定できない⁽¹⁰⁾ ということを前提に、「検索した1,017件の史料のうち393件が、ベルンシュタイン文庫の目録第6巻に含まれる『希少』な史料である」⁽¹¹⁾ と結論付けた。

彼女には、その後4,049点の史料の調査を継続していただいた。つまり、総数で5,066点の調査⁽¹²⁾ をお願いしたことになった。それらの成果については次章でまとめて紹介することにしよう。

2009年度は、プジョルス女史の都合もあり調査は中断することとなった。代わりに誰にお願いすべきかということでIHRFとの間で検討するということを経験したが、年度後半より様々な経緯を経て、筆者が2006年よりお世話になっていたオート=ロワール県文書館副館長 *Adjoint au Directeur des Archives départementales de la Haute-Loire* のティエリ=アルワン **Thierry ALLOIN** 氏に5,067番目からの調査続行⁽¹³⁾ をお願いすることになった。

Th=アルワン氏には、前述のようにル=ピュイ=アン=ヴレ市の下級選挙集会時

⁽¹⁰⁾ Maria Betlem Castellà PUJOLS, « La Valeur et le caractère historiques de la Collection des Documents de Michel Bernstein: Une analyse du tome 6 du catalogue », *The Michel Bernstein collection.*, p. 26.

⁽¹¹⁾ *Loc. cit.*

⁽¹²⁾ M. B. C. PUJOLS, « Au-delà de la rareté des merveilles. Deuxième analyse du tome VI du Catalogue de la Collection de Michel Bernstein », *Annales des Etudes de la Révolution française et la Collection des documents de la Michel Bernstein*, 2009.

⁽¹³⁾ Thierry Alloin, « La Valeur et le caractère historique de la Collection des documents de Michel Bernstein: Troisième analyse du 6 du catalogue de la Collection M. Bernstein, No. 5067~6300 », *Annales.*, 2010.

の第三身分陳情書 *Cahier de doléances du tiers état* を校訂するに当って貴重な助言をいただいていた、また、『比較目録』第6、7巻の調査に関して、さらに、国立文書館や各県文書館所蔵史料との比較も必要になってくるとの前提から、手始めとしてオート・ロワール県文書館のフランス革命関連史料と「ベル文」の同県関連のそれとの比較調査を同時に着手すべきとの判断もあってその協力を要請していた。その2010年度の調査結果は、「*Catalogue de la Révolution française relatif aux départementales de la Haute-Loire dans la Collection des Documents de Michel Bernstein*」というタイトルで、*Annales des Etudes de la Révolution française et la Collection des documents de Michel Bernstein*, éd. Institut pour le Développement de l'Intelligence Sociale de l'Université SENSU/Centre d'Etude des Documents de la Révolution française, 2010 に公表された。この試みは、オルヌ県文書館との間でも進められている。

さて、こうして Th=アルワン氏は2009年9月から調査を開始し、本年(2012年)9月末をもって、ベルンシュタイン氏が Tome 番号で最後の 9,090[12]17 とした第7巻の 1,435 頁までの調査を終了させた。史料総数の 11,660 点のうち、5,067 点目から最終までの全部で 6,594 点の調査であった。

3、「ベル文」にしか「存在しない」史料

こうして、プジョルス女史やアルワン氏をはじめフランス側の多くの方々の協力によって 11,660 点の比較調査研究はとりあえず終了したのであるから、最後に、その結果について報告することが求められる。とは言っても、先述のように、この調査結果はさらに AN と AD などが所蔵するフランス革命関連史料との比較という仕事が残っていることから、完全版とは言えない状況下にある。しかしそれでも、BN の『フランス革命史料目録』との比較を柱として調査を進めてきていることから、少なくとも「BNにはない」史料の確認は終了したと言えるだろう。また、電子情報として処理されていない各種の図書館や文書館の史料情報との比較の問題を抱えているとは言え、今回の調査終了段階における「ベル文」にしか「存在しない」史料についての公開は、「ベル文」の史料的价值を見定める最初の試みとして重要であるだろう。

(1) 調査結果

『比較目録』第6、7巻に収められた史料情報は、M=ベルンシュタイン氏が付した Tome 番号の1番から9,090番までに整理されているもので、総史料点数としては11,660点になる。調査に際して、第一に、M=ベルンシュタイン氏によって与えられた書誌情報（発行地、発行者、発行年、形状、枚数）と厳密に一致するもの、第二に、発行地、発行者が違っていたり、あるいはいくつかの図書館やマスメディア史料館、さらにフランスの大学が、所蔵史料の形状や枚数を常に記しているとは限らないなどの理由で、M=ベルンシュタイン氏によって与えられた書誌情報とは厳密に一致しないもの、第三に、フランス側の情報に確認されなかったもの、というように3区分して実施した。さて、それらの調査結果であるが、その内、4,310点が「ベル文」にしか「存在しない」であろうと思われる史料であることが判明した。この数は全体の約37,0%になる。まずもって、この事実はいわゆる「ベル文」所蔵史料の「希少性」を示す数値として最重視すべきであろう。確かに、視点を変えてみれば4,310点のフランス革命関連史料の「新史料」が確認できたということは注目すべきであろう。この中に果たしてどのような史料があるのかなどは気になるところであるが、それは、後ほど見ていくことにしよう。

ところで、M=ベルンシュタイン氏はBNに存在しないとして第6,7巻収録の史料を特定していたわけであるが、結果は意外な事実を私たちに教えてくれる。この調査からは、M=ベルンシュタイン氏が下した結論とはとは逆のことが見えてきている。これは、フランス側の諸機関に確認できた7,290点の史料全体について統計を正確にとったというわけではないが、それらの中のかなりの部分を実際には現在BNに所蔵されているものということが明らかになった。このことについては、すでにプジョルス女史が最初の1,017点の調査について報告した際にも指摘されていた⁽¹⁴⁾ ことでもある。それによると、1,017点段階でフランス側に確認された史料624点の内73,8%はBNに存在することが判明した。この傾向は、最終的に確定した総数7,290点の史料についても言える。

⁽¹⁴⁾ M. B. C. PUJOLS, « La Valeur », p. 23.

(2) フランス側において「確認されなかった」史料群の特徴

では、今回の調査終了時にフランス側において「確認されなかった」史料にはどのようなものがあるのかということが最後に述べられるべきであろう。現段階では、4,310 点全体の詳細な検討は終了していないが、目だったところだけをとりあえず指摘することにしよう。これについての全面的な分析とその結果報告は別の機会に公開されることになる。

まず、一般的な特徴から述べることにしよう。フランス側に確認されているものにはパリの高等法院や名士会に関する史料や、全国三部会、憲法制定国民議会、立法議会、国民公会、五百人会などに関する議事録など、フランスの『議会史料集』*Archives parlementaires* などで見ることのできる定番のものが多かったのに対して、確認されなかった史料としては、パリ市の議会議事録や、いくつかの県や郡議会の議決、議事録、政令、苦情書や陳情書、建言、さらには無名の市民たちの演説、手紙、声明などが多い。

つまり、国王や各段階の革命政府機関およびそれに関係する大臣や議員、裁判所から出されたもの、または地方から国王や革命政府に宛てられたものではなく、革命政府に由来しない議決、議論、演説、手紙などがめだっている。さらに言えば、中央というよりは地方の、名望家というよりは市井の人々が残したものであり、それらは、きわめて「匿名性」の高い生の考えや眼差し、ささやき、告発、叫びといった類のものである。これらの史料群はパリを中心とした革命の展開と同時進行していた地方や一般民衆の意識や行動の実態を正確に伝えてくれるものとして貴重である。

次に、注目すべき史料群に接近してみよう。第一に、「民衆協会」*Sociétés populaires* などの政治結社に関するものである。『比較目録』によれば、当該史料総数は統計を取ってみると 814 点あり、その内フランス側に確認できなかったものが 210 点（約 25,8%）となっている。今回のミニコローク（2012 年 11 月 26 日開催）ではミシェル=ビアール Michel BIARD 教授がその一部⁽¹⁵⁾を

(15) 1) *Adresse de la société des amis de la constitution de Lisieux, à la garde nationale de la même ville*, Lisieux, J. Delaunay, s. d. [1791], 8 p. (*C. D. M. B.*, tome 1700, n. 7); 2) *A. M. Fauchet, évêque du département du Calvados*, Caen, P. Chalopin, 1791, 7 p. (*C. D. M. B.*, tome 2158, n. 6); 3) *Adresse de la société des amis de la constitution d'Argentan, aux ecclésiastiques fonctionnaires publics du District, qui refusent le Serment*, Alençon, Malassis le jeune, 1791, 41 p. (*C. D. M. B.*, tome 3042);

分析されている。これについては、いずれ「ベル文」所蔵のテーマ別史料集シリーズの一つとして取り上げていくことになるはずである。

第二には、1789年5月の全国三部会に向けて作成された陳情書である。この段階の陳情書について、私たちはベアトリス・F・イスロ Béatrice F. HYSLOP の仕事で全体的な史料の分布状況を掌握するのが一般的であるが、彼女の調査では不明とされたり、あるいはオリジナル史料は欠如しているとされた地域の陳情書が散見される。特に、Tome 344 の *Cahiers de doléances du Tiers-Etat d'Albi* の存在は注目される。先述ように、筆者は『比較目録』第7巻の後半部にまとめられている フォリオ版 (folio、二つ折り版) 史料のところに複数のオリジナルな陳情書を確認し、その内、ル・ピュイ・アン・ヴレ市のもなどを校訂し始めている⁽¹⁶⁾ が、これらもテーマ別史料集として出版する必要が出てくるように思われる。

第三には、その他のものとして革命中に名を馳せた人物に関するものが散見される。その内、希少価値の高いものとして、例えば「シャルロット=コルデ判決文」 *le jugement de Charlotte Corday*⁽¹⁷⁾ に関する史料は単に彼女についての情報だけでなく、テルール期 *l'époque de la « Terreur »* の裁判の実態を知る上でも重要な史料であるといえる。その他にも、名前を挙げればきりが無いほどの人物に関する手紙やメモワールなどが多数存在しているのが確認されている。革命という激動の歴史上における個人の役割・評価という面でも見過ごせない史料であり、それらの存在は革命の実態に迫る際には欠かせないものである。

4) *Enfin, une lettre manuscrite sur papier imprimé de la Société des Amis de la Constitution de Bayeux* (juin 1791), 2 p. (*C. D. M. B.*, tome 2337, n. 6).

⁽¹⁶⁾ 近江「オート・ロワール県ブリウド市 (Brioude) の陳情書校訂 (1) —1789年3月における第三身分第一次選挙集会時の陳情書—」(『専修総合研究』第20号、2012年10月)、1~20頁; 同「陳情書校訂[2]」(『専修史学』第54号、2013年3月)、28~49頁。ル・ピュイ・アン・ヴレについては注(4)と(5)を参照。

⁽¹⁷⁾ 1) *Jugement rendu par le Tribunal criminel révolutionnaire* (*C. D. M. B.*, tome 144, 8 p.); 2) *Charlotte Corday, ou, la Judith moderne tragédie en trois actes et en vers* (*C. D. M. B.*, tome 1490, n. 6, 144 p.).

おわりに

以上のように、本来ならば立場上も冷静でいなければならない筆者ですら興奮を隠せないほど、『比較目録』第6、7巻の史料情報は、まだ、フォリオ版や新聞史料などの全容紹介の作業は残しているとはいえ、実にセンセーショナルな内容に富むものであったと結論付けられるであろう。

言ってみれば、「ベル文」とは「宝の山」である。それは筆者ばかりでなく、世界のフランス革命史研究者にとっても、はたまた「ベル文」を所蔵する専修大学およびその関係者にあってもそうである。そして、これはフランス革命理念の実現を求め、様々な困難と闘っているフランスをはじめとする世界各地の人々にとってもそうであるに違いない。今回は、2007年より日仏の多くの方々の協力の下、この「宝の山」の実態を明らかにすべく実施されてきた6年間の「発掘調査」の結果報告と相成った⁽¹⁸⁾。残された課題も少なくないが、ともかくも、こうして「宝」の中身を確認し合えたことを、これに関係する皆さんと共に喜びたいと思う。

また、この共同調査研究の過程で当時『フランス革命史年報』編集長であったルーアン大学のM=ビエール教授との出会いがあり、2010年より「ベル文」史料中のオルヌ県関連史料を中心にノルマンディー地方全体の貴重史料の調査を開始した⁽¹⁹⁾。これはオート=ロワール県同様に県単位に「ベル文」を捉え直

⁽¹⁸⁾ これらの報告は、*Annales des Etudes de la Révolution française et la Collection des documents de Michel Bernstein, 2012-2013*, éd., Institut pour le Développement de l'Intelligence Sociale de l'Université SENSU / Le Centre d'Etude des Documents de la Révolution française. を参照。

⁽¹⁹⁾ この共同調査の結果、「ベル文」には国民公會議員に係わる多くのメモワールが収録されていることが判明した。これらの史料を活用すべく2013年11月23日・24日には本学生田校舎において日仏コロークが開催された。本学フランス革命史料研究センターとACTAPOL（フランス3大学<ルーアン大学、クレルモン=フェラン大学、リール第三大学>共同研究プロジェクト）共催によるもので、「経験の歴史を綴る：革命・記憶・国民公會議員の歴史」のテーマの下に、フランス側から6名（ミシェル=ビエール Michel BLARD, フィリップ=ブルダン Philippe BOURDIN, エルヴェ=リュヴェール Hervé LEUWERS, カリヌ=ランス Karine RANCE, シリル=トリオレール Cyril TRIOLAIRE, ロラン=ブラッサール Laurent BRASSART）、日本側から5名（小井高志<立教大学名誉教授>、山崎耕一<一橋大学教授>、松浦義弘<成蹊大学教授>、佐藤真紀<信州大学准教授>、近江吉明<専修大学教授>）が二日間にわたり、ロベスピエール、バレンヌ、カルノーさらには地方に派遣された派遣議員らが残した手紙やメモワールをもとに山岳

そうとする作業の一環であったが、この共同調査の中で、M=ベルンシュタイン氏を研究対象にする⁽²⁰⁾ 必要性も出てきている。

そして、言うまでもないことだが、こうした私たちのいくつかの試みのシナリオを結果として作り上げていたM=ベルンシュタイン氏の長年の努力に感謝し、また、彼のそのようなメッセージに幾分なりとも応えることができたことを幸いとして本稿を終わらせていただく。

(本稿は、平成 24 年 11 月 26 日に仏文にて報告されたものの日本語訳に大幅な加筆訂正を施したものである)。

派独裁期のテルールの諸側面を分析した。

また、当コロークでは本学の新井勝紘教授による記念講演「フランス革命と自由民権」を行ない、自由民権期において、とりわけ地方の民権活動家のなかでフランス革命がどのように捉えられ記憶されていたのかについて報告した。さらに、このコロークに合わせて本学図書館・特別展「フランス革命と自由民権」が開かれ、新井教授のコレクションや「ベル文」の貴重史料が展示された。

⁽²⁰⁾ Y. OMI et M. BIARD, « La Collection Michel Bernstein », *Annales historiques de la Révolution française*, N. 364, Avril / Juin, 2011.